

S100P in Duodenal Fluid Is a Useful Diagnostic Marker for Pancreatic Ductal Adenocarcinoma

松永, 壮人

<https://hdl.handle.net/2324/2236060>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (医学) , 課程博士
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



(別紙様式2)

氏 名	松永 壮人			
論 文 名	S100P in Duodenal Fluid Is a Useful Diagnostic Marker for Pancreatic Ductal Adenocarcinoma			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	中西 洋一
	副 査	九州大学	教授	小川 佳宏
	副 査	九州大学	教授	康 東天

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

膵管癌の予後は不良である。予後改善のために有用なスクリーニング法の確立が求められている。申請者らは上部消化管内視鏡検査（esophago-gastro-duodenoscopy: EGD）や超音波内視鏡（endoscopic ultrasonography; EUS）時に採取した十二指腸液中の分子マーカーの膵管癌のスクリーニングにおける有用性について検討した。

2011年10月から2014年7月の間に、九州大学でEGD、あるいはMayo clinic（フロリダ州・ジャクソンビル）でEUSを受けた膵管癌患者94名、膵管内乳頭粘液性腫瘍患者85名、慢性膵炎患者29名、正常膵の対照者61名を含む計299名を対象とした。十二指腸液は膵液分泌促進剤であるセクレチンを投与せずに採取され、分子マーカーとして十二指腸液中CEAとS100Pの濃度を測定した。その結果、十二指腸液中S100P濃度は膵管癌群、慢性膵炎群で正常膵対照者群より有意に高かった。S100P濃度と年齢を合わせたロジスティック回帰モデルでは、stage 0/Ia/Ib/IIaの膵管癌の診断感度、特異度は85%、77%であり、receiver operating characteristicカーブから算出されるarea under the curveは0.82であった。十二指腸液中CEA濃度は各膵疾患群と正常膵群の間に有意差を認めなかった。

以上の結果より、申請者らは一般的な検査であるEGD時に施行可能な十二指腸液中S100P濃度測定が、膵管癌の診断に有用である可能性を示した。

以上の成績はこの方面の研究の発展に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが概ね適切な回答を得た。

なお本論文は共著者14名であるが、予備調査の結果、本人が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。